

横浜

CAFE WEST

Yokohama Renaissance

ルネサンス



Number 14

特集

ハマの女流新星

Who's Who in YOKOHAMA

鈴木伸治さん

CHURU-CHUW



横濱信用金庫

ごあいさつ

横浜信用金庫理事長
斎藤 寿臣

『横浜ルネサンス』第14号をお届けします。『横浜ルネサンス』は、当金庫の創立80周年記念事業の一環として、2002年10月に創刊しました。当初は年1回の発行でしたが、2006年から春と秋の年2回発行とされています。

本号では、特集「ハマの女流新星」と題して、横浜で魅力的な活動を続ける女性を取りました。従来は男性が登場することが多かったのですが、今回は女性だけを集めてみました。Who's Who in YOKOHAMAでは、黄金町で街の再生計画に取り組む横浜市立大学の鈴木伸治准教授とゼミ生の皆さん、ジェリービーンズコンサートの常連でフルアルバムのメジャーリリースをまちかに控えるバンド、CHURU-CHUWをご紹介しました。

第7回「横浜の聴き方」では、桑田佳祐の作詞作曲で中村雅俊が歌ったヒット曲「恋人も濡れる街角」を取り上げています。

『横浜ルネサンス』第14号、お楽しみいただければ幸いです。

表紙撮影：矢部志保

A Table of Contents

横浜絵解き図鑑／アボカドの輸入	2
目次／理事長挨拶	3
特集 ハマの女流新星	
浅葉和子 アーティスト	4
先住民族の知恵をアートイベントに活かす	
浅岡なつき 横浜美術館指導員	6
夢は繰り返し行ききたくなる楽しい美術館づくり	
岩室晶子 ミュージシャン	8
自由な発想で街を元気にするミュージシャン・ママ	
高村典子 会社員	10
崖っぷちOLの集中力が生む驚異の行動力	
横浜エンジェルズ ボーカリスト&DJ	12
ハマの魅力を発信する人気DJユニット	
ヨコハマジュエルコミュニティ・タレント・ユニット	14
フラからレポーターまで出前OKの街おこし応援隊	
横浜を詠む 水原紫苑 写真：矢部志保	16
Who's Who in YOKOHAMA	
鈴木伸治 横浜市立大学准教授	18
灯りと対話が増えるほど街は活性化する	
CHURU-CHUW ロックバンド	20
結成11年目に全国区行が決定したロックンロール・バンド	
横浜の聴き方 第7回 中島久	22
『恋人も濡れる街角』中村雅俊	
横浜ジェリービーンズ倶楽部通信	23

◎横浜絵解き図鑑

アボカドの輸入



アボカドのバター、アボカドの輸入が好調だ。アボカドはクスノキ科ワニナシ属の植物で、中南米地方が原産。ココヤシの育たない熱帯の内陸地域では、アステカやインカの時代から重要な脂肪の供給源として大切に栽培されてきた。

アボカドの果肉は、甘さや酸味などではなく、脂肪分が高くバターのような食感がある。この脂肪分の多さは、アボカド最大の特徴で、100gあたり187キロカロリーというエネルギーの高さは、バナナを上回っている。しかしこの脂肪分は、不飽和脂肪酸が主体なので、コレステロールを増やす心配がない。

アボカドは、その他カリウム、マグネシウム、リンや鉄などのミネラルや抗酸化作用のあるビタミンEをはじめとする各種ビタミンをバランスよく含んでおり、また、食物繊維も多く含んでいることから、健康志向の流れに乗って輸入が伸びているようだ。

平成20年の全国におけるアボカドの輸入実績は、輸入数量が24,073トン（対前年比9.2%減）、輸入金額が75億99百万円（同1.4%減）で、輸入数量は過去5番目、輸入金額は過去2番目だった。

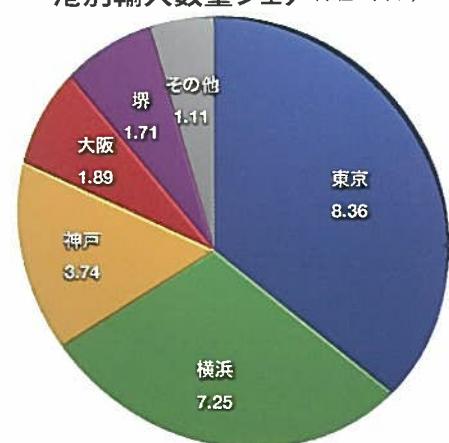
また、横浜港においては、平成20年の輸入数量が7,251トン（対前年比12.2%増）、輸入金額が23億48百万円（同21.0%増）で、輸入数量及び輸入金額ともに過去最高を記録した。

また、全国及び横浜港における平成21年上半期（1~6月）における輸入数量は、それぞれ過去最高であった年（全国は平成18年、横浜港は平成20年）の上半期の輸入数量をすでに上回っており、好調に推移している。

入先を国別にみると、メキシコからの輸入が全国で95.8%、横浜港で95.5%を占めて第1位のシェア。これは、メキシコが世界第1位の生産国であり、ほぼ通年収穫できるこ



港別輸入数量シェア（単位：千トン）



とが要因となっている。また、南半球に位置するニュージーランドとチリからは、主に日本の秋から冬にかけて輸入されている。

ア先住民族の知恵をトイベンツに活かす



金沢文庫の芸術の秋の主役は子どもたち

八景島シーサイドパラダイス、横浜ベイサイドマリーナを擁する金沢区の子どもたちが心待ちにしている秋のイベントがある。「海の公園」で開催される「DAY」イベントだ。同イベントは「金沢文庫芸術祭」のオープニング・イベント。11回目となる今年は9月20日に実施された。「金沢文庫芸術祭」はこのイベントをきっかけに10月1日から11月30日まで2ヶ月間にわたり「街角アートラリー」と称して実施される。舞台となるのは金沢区と近郊のギャラリーやカフェ、アーティストの自宅。開催期間中の任意の日時を出展者が選んで、さまざまな展示が行われる。「いつもの街がアートな街になる2ヶ月間」という触れ込みだ。

スタートとなる「DAYイベント」の主役は子ども。会場内にいたるところで、自作アートを展示了したり、太鼓を叩いたり、パレードの衣装をつくつたり、踊つたり。夕方になると、カラフルに色付けされたお面や、ピンクや青のビニール袋にキラキラ光る装飾をほどこした衣装で着飾つて会場内を練り歩く。不思議な格好をして次々と現れる子どもたちを見ていると、自然と笑顔になってしまふ。

先住民の教えで美しい地球を残したい

この芸術祭の仕掛け人が、金沢区で「子供のデザイン教室」を主宰する浅葉和子さんだ。

浅葉さんは以前から世界各国の子どもたちと絵を通じた異文化交流事業を行つてきた。また、自身がアメリカインディアンの絵に触発されてニューメキシコへ渡つたこともある。そうした先住民たちとの交流を通して、上手に環境と付き合つてきた先住民族の知恵を感じていた。

そんな体験から、「地球の未来を考えるのなら、先住民族の教えや生き方に学ぶことは多いのではないか」と、思つてきた。振り返つてみると、夢、花、反戦と色々なテーマで開催してきたが、それらはいずれも「子どもたちに残したいと思う環境」だ。だが、それを具現するにはどうすればいいか。しかも、みんなで楽しく考えながら……。

浅葉さんはさまざまな思いを「先住民」ということばに集約した。そして、昨年からイベント会場の中心に「先住民族広場」を設けた。またテーマも「このもの未来は地球の未来」とした。浅葉さんの狙いはあたつた。主旨に賛同する仲間が少しづつ増えていった。

具体的に、楽しく行動する次世代の登場

「広場」構築の中心となつたのは、鎌倉で先住民族のクラフトショップ「ミッドルズ」を営む柴田信之さんだつた。今年もハワイ、マヤ、インド、アマゾン、アイヌなど、19民族もののブースが出店し、先住民の知恵を体験するワークショップやイベントが参加者の好評を呼んだ。

なかでも、アマゾン先住民直伝のボディペインティングを出店した南研子さんのワークショップは好評だつた。南さんはアマゾンへ20年以上通い続け、先住民との暮らしを体験し、森林を守る活動をしてきた方。カラフルな顔や腕をした観客やスタッフが会場内にあふれ、祭りを彩つた。

また、昨年から息子の弾さんが芸術祭の事務局長を務めるようになり、そのつながりで若いメンバーが増えた。今や、スタッフは総勢約200名だ。

さらに、5歳から参加していた子どもが高校生になり、何かやりたいと「虹の翼隊」を結成し活動を始めた。DAYイベントでは、エコをテーマに「虹の翼隊」を組成し活動を始めた。DAYイベントでは、エコをテーマに「虹の翼隊」を組成し活動を始めた。11月30日まで開催中。<http://www.bunko-art.org>

あさは かずこ
武蔵野美術大学グラフィックデザイン科卒業。日本児童美術研究所代表。1968年より横浜市金沢区で「子供のデザイン教室」を主宰。児童絵画を通しての異文化交流をエジプト、アメリカ、ベトナム、アフリカなど活発に行う。1991年ロサンゼルス・カリフォルニア州立大学、ニューメキシコ大学でアートセラピーを学び、アメリカ先住民、北ブエプロ族と交流。1999年より、金沢文庫芸術祭を立ち上げる。チーフプロデューサーとして、アートを通じての人興し、街興し運動を目指す。

第11回金沢文庫芸術祭(街角アートラリー)は11月30日まで開催中。
<http://www.bunko-art.org>

Photo by Takahashi

夢は繰り返し行きたくなる 楽しい美術館づくり



美術館の中にある子どものアトリエ

みなどみらいに開館して20周年の横浜美術館に、「子どものアトリエ」がある。粘土遊びのフレーム、紙工作のクラフトルーム、光と音のスタジオ、絵の具で遊べる中庭などに設備が揃っている。カラフルで広い空間に足を踏み入れると、子どもだけではなく大人も心を弾ませる、開館当初から人気が絶えないアトリエだ。

そんな「子どものアトリエ」に勤務して丸4年、日々、子どもたちに美術の楽しさを教える修行に励む女性がいる。浅岡なつきさんだ。

浅岡さんは、大学で造園を学んだ。建築業界に就職したがすぐに辞めた。「建築の世界は自分にとって規模が大きすぎた」のだそう。

そこで改めて定めたテーマが教育だった。大学時代から環境教育や食育に興味があったこともある。なによりも、「社会をよりよくする人を育みたい」と、この仕事に就いた。

造形講座で目からウロコがおちた

平日、「子どものアトリエ」には市内の小学校や幼稚園等の児童が体験学習の一環で訪れる。

アトリエの一番人気は、月3回の自由開放「親子のフリーゾーン」。平均参加者数はなんと500人と、大にぎわいの人気ぶりだ。

日曜・祝日には「造形講座」が開講される。先生は浅岡さんの先輩。先輩の指導法は、最初に作品ができる仕組みを教え、あとは子どもたちが自由に制作するというスタイルだ。

葉を緑色でなく、紫色で塗つてもいい。力二の足が赤色でなく、黄色でもピンクでもいい。

子どもの自主性に任せることで、先輩の指導法に、浅岡さんは目からウロコが落ちたという。「今まで『こうでなければいけない』と思いついていた常識を覆された」。

そこで同時に、子どもの良いところをたくさん見つけて伸ばすという先輩の方針から、人の個性や多様性を認めることの大切さに気づいたという。

「個人の違いや長所や短所を認め合っていれば、意見が対立しても、相手を攻撃しなくてすむ。当たり前のこと。ここで初めて実感し、性格も大らかになつた気がします」と浅岡さんは笑顔で過去を振り返った。

子どもの心に美術の種を

体験学習中に、子どもたちに美術館を見せるのも浅岡さんの仕事のひとつだ。

作品を見る練習として、絵画の前にみんなで座り、この絵に何が見える?といふ質問から始め、どんな雰囲気を感じる?好き?嫌い?と、ひとりひとりに尋ねる。

「作品を見てどう思ったのかを口に出す

ことで、自分の心の動きを知つてほしい」からだ。

最近は、少人数を相手にして教えることも少しずつ増えてきた。だから「今は子どもたちに伝わる説明法を一生懸命に勉強している」。

その一方で、触れあった子どもたちとのその後の関わり方も考えている。

放つておけば、子どもと美術館とのたまご見つけて伸びすという先輩の方針から、人の個性や多様性を認めることの大切さに気づいたという。

「個人の違ひや長所や短所を認め合つていれば、意見が対立しても、相手を攻撃しなくてすむ。当たり前のことを、ここで初めて実感し、性格も大らかになつた気がします」と浅岡さんは笑顔で過去を振り返った。建設的なビジョンを描く浅岡さんだった。

あさおか なつき
横浜美術館芸術教育グループ指導員(子どものアトリエ担当)。1980年生まれ。港南区出身。千葉大学園芸学部卒業後、建築関係の仕事に就く。教育普及に携わりたいと転職し、現在に至る。
子どものアトリエの詳細は、横浜美術館ウェブサイト内「子どものアトリエ」
<http://www.yaf.or.jp/yma/children/001>
お問い合わせはTEL: 045-221-0315(木曜休館)

Photo by Yabe Shige

自由な発想で街を元気にする ミニヨコハマシティ



いわむろ あきこ
作・編曲家。NPO法人I Love つづき事務局長。NPO法人ミニシティ・プラス副理事長。日本ナポリタン学会副会長。街づくりNPOの仕掛け人として、都筑区や横浜市環境創造局、こども青少年局等と様々な協働プロジェクトを行っている。愛知県名古屋市出身。
NPO法人I Love つづき
<http://www1.tmtv.ne.jp/~ivtuzuki>
横濱良品館
<http://www.rakuten.co.jp/yokogoo>
NPO法人ミニシティ・プラス
<http://minicity-plus.jp>
日本ナポリタン学会
<http://naporitan.org>

音楽畠で培つたノリで楽しく市民活動

今年で区政15周年を迎えた都筑区は、平均年齢が38歳と、県内の市区町村でも最も若く、子育て人口も多い。

そんな都筑区で住民参加型のヒット企画を出し続けているのが岩室晶子さんだ。本業は音楽家。つるの剛士やヘキサゴンファミリー、新撰組リアンなどのアレンジャーとして活躍している。

子育て環境を求め都筑区に移住したのは10年ほど前のこと。2001年に区の広報誌で見つけた保育つきの環境学習会に参加したのがきっかけで、その時の仲間と共に立ち上げた「NPO法人I Love つづき」事務局長となった。

「どうせやるなら楽しく本気で」が口癖の岩室さん。「音楽には形がなく、波のように空気を伝わるもの。街の活気も同じで、工夫して新しく、面白いものを作りたい」という。

音楽で人を楽しませてきた岩室さんのポジティブで自由な発想に、周囲も共鳴し、活動の輪が広がつていった。たとえば、2003年はじめた落書き消し運動は「落書きされない壁プロジェクト」に発展し、センター南駅前広場に設置する壁画のコンテストにま

で昇華した。これには全国から331もの応募が集まり、壁画の制作を含め、6000人近くが参加した大プロジェクトになつたそうだ。

子どもの発信力に期待

2007年には、I Love つづきの有志メンバーや横浜市職員他と「NPO法人ミニシティ・プラス」を立ち上げた。これは、19歳以下の子どもたちだけで構成される仮想の街を作り、やつてみた役割、仕事を担当し、社会という仕組みを実感するというユニークなイベント「ミニヨコハマシティ」を運営する团体だ。

「子どもの心に響くと、周りの大人にも声が届く。平均的な子に育てようとする今の社会の中で、子どもたちに自由な発想を引き出せるステージを提供したい。仕事の楽しさ、街づくりのおもしろさを伝えたい」という。

3回目となる今年は、8月の大桟橋ホールでの開催は、「子どものまち世界会議」も誘致しての大イベントとなり、3000人の子どもたちが参加した。

現在、子どもスタッフ登録者数は430人。今回のミニヨコハマシティ運営は120人で行つた。

「このイベントを通じて次世代の街づくりリーダーが育ちつつある」と岩室さんは、「ミニヨコハマシティ」の市議会議長を務めた高校生スタッフが、「その活動を評価され、横浜市立大学に推薦合格を果たした」と、喜びを隠さない。

そんな岩室さんが、最近力を入れているのは、I Love つづきで運営するインターネットショップ「横濱良品館」。区内の小規模福祉作業所での手作り品を中心販売、地域の子育て中のママたちがシステムを支える仕組みにトライしている。お菓子やハーブティー、バッグ、犬用クッキーなど、品数はまだ多くないが、良いものを厳選した品揃えが話題となつていて。

また、横浜発祥といわれるスパゲッティナポリタンを研究し、普及させたい」と話し、学会メンバーと一緒に「日本ナポリタン学会」なるものも始めた。「ナポリタンを通して横浜を盛り上げたい」と話し、学会メンバーと一緒に「ナポリタンお店マップ」の発行やナポリタノ関連の商品開発もしたいともくろむ。岩室さんの自由奔放な発想と活動は、これからも止まることなく続いていきそ

うだ。

崖つぶちOLの集中力が生む驚異の行動力



Photo by Yabe Shihō

たかむら のりこ
東京都出身。2004年、参画していた異業種交流会の4人の女性とWomen's Networking Café「はる美」(<http://plaza.rakuten.co.jp/wncyokohama>)をオープン。週末限定で営業している。よこはまマザーポート楽校事務局長。横浜市民メディア連絡会事務局長。Y150エビローカフェ主宰。横浜ドラマ計画メンバー。

女性会社員がY150で見せた企画力

昼はO.L.、金曜の夜はバーのママ、土日は市内各地で市民活動、毎日忙しく駆け回る高村典子さん。横浜の市民活動界では、いつたいたいどうやつて時間を作つているのかと話題の“スーパー姉御”として有名だ。

幕を下ろしたばかりの横浜開国博Y150では、ヒルサイド会場で「エビローカフェ」を主宰。朗読、トークショウ、映像上映、新聞紙でバッグを作るワークショップ、よさこい踊りと、バラエティに富んだメニューで来場者を喜ばせた。

また、ベイエリア近辺を歩きながら横浜雑学を身につけようと呼びかける「よこはまマザーポート楽校」では、Y150マザーポートエリアの地図「たねまるマップ」の制作にかかわった。Y150終了後の現在は、「横浜ドラマ計画」の一員として、普通の市民の暮らしの記録作成に携わっている。

同時に複数の企画運営に関わり、2本、3本とイベントの「はしご」をする高村さんだが、けつして穴を開けない。その卓越した行動力の源泉と時間配分はどうなっているのか伺つてみた。

仕事と活動を両立させるO.L.の一日

高村さんは自らを「崖つぶちOL」と呼び、周囲にも「高村さんはいつも仕事をしているの」と言われるそうだ。だが、週5日都内の会社で勤務する、れつきとした会社員である。

毎朝7時半起床。トーストとコーヒーにカスピ海ヨーグルトで作るバナナシェイク。9時半に出勤。昼休みは昼食を早めに切り上げ、パソコンで市民活動にあることもあるが、通常は普通のO.L.だ。少し違うのは、退社後だ。19時から21時は横浜市内で会合に参加することが多い。帰宅して夕食をとり、23時頃からメールチェックやブログの更新。日付が変わつて1時には入浴、1時半には就寝する。忙しくても食事は3食欠かさず、睡眠は6時間という規則正しいリズム。健康への配慮も見事なものだ。ただし、金曜を除いて。それにしても、退社後の2~3時間と、就寝前の2時間程度で、市民活動はこなせるのだろうか……。

「多分、それができるのは“場”と“星”があるから」と高村さんは言う。「時間の使い方がうまいというより、困つたときに誰かが助けてくれる場所と、ラッキーな星の下に生まれたらから……」。

働く女性たちでバーを開店

その“場”とは、バーモニカ横丁の愛称で知られる都橋商店街の一角にあるバー「はる美」。日替わりでカウンターに立つ女性たちのほとんどは会社員。働く女性と女性たちを応援する人が訪れる店にし

たい。面白い企画や頑張っている人、若い人を応援したいと、2004年にオーナーを応援したいと、2004年にオーナーになった。そして老若男女問わず個性的な人がやってきた。

高村さんがママを担当するのは金曜日。目の前でお酒の力も手伝つて、思惑通り、話がはずみ新しい企画が生まれていった。新しい絆が生まれていった。だから、高村さんは面白い人をたくさん知つている。また、面白い人を見分ける嗅覚も鋭い。

「私は、面白いことのそばにいるだけ」と謙遜するが、面白いと思えるからこそ集中的に時間を使つこなせるのだろう。また、複数の企画を采配し、適切な人を貼り付ける力はその嗅覚によつているに違ひない。「崖つぶちOL」の集中力

を貼るべしと言つべきか。

ハマの魅力を発信する 人気DJユニット



ガールズトークの深夜番組が人気

FMヨコハマで毎週金曜の深夜に放送中のインディーズ専門番組「ヨコハマミュージックアワード」。インディーズの音楽シーンを取り上げる日本最大規模のプログラムだ。

そこに毎月第1金曜の深夜に登場するのが、3人の女性ボーカリストによるユニット「横浜エンジェルズ」。2006年春に番組を始めて以来、ハイテンションでプライベートを赤裸々に語り合うガールズトークが人気で、今年で4年目を迎えた。

実はこの3人、横浜のインディーズ界では定評のあるバンドの人気女性ボーカリスト。I・Rabbits（アイラビッツ）のマイコと、LiLi（リリ）のゴリと、Capock（カポック）のジュンコだ。普段は個別に音楽活動をしているが、バンドを結成して6～7年目、そして、横浜信用金庫の主催するジエリービーンズ・コンサートの常連という共通点がある。同期のバンド仲間であり、よきライバルというわけだ。

互いを高め合える、女3人の良い関係

3人の個性は驚くほど違う。

地元愛の強い横浜の良さを広めたい

キヤラクターが違う3人だが、地元のファンに支えられている、という心強さと、感謝の気持ちも共通だ。それぞれに、横浜への想いを聞いてみた。

横浜のファンが帰りを待つていてくれ

I-Rabbitsのマイコは、バイトリティと機知にある回転の速いトークが売りだ。

「実は、女友達は少なかったので、番組開始当初は友だけで話がかみ合つてやつていけるのか不安だった」と話す。しかし、番組が始まるとすぐに女同士ならではの話の展開の楽しさに気づいた。今はそれにヒントを得て21組のガールズバンドのライブを自ら企画するほどだ。

その一方で、LiLiのゴリは、女友達は多かつたが、男の子や恋愛の話は苦手だった。今でも相方二人の経験談を聞きたながら、「内心驚くことが多い」というちょっと控え目なタイプ。

Capockのジュンコは、収録前にお互いの1ヶ月の報告をすることで、「自身の活動を振り返ることができ」と語る堅実派。ほんの数分でも、「それが互いに刺激となり、高め合うきっかけとなる」とか。

Capockのジュンコは、収録前にお互いの1ヶ月の報告をすることで、「自身の活動を振り返ることができ」と語る堅実派。ほんの数分でも、「それが互いに刺激となり、高め合うきっかけとなる」とか。

「横浜にはまだ知られていない良い場所がたくさんあるんですよ」と、マイコとジュンコをちょっぴり牽制して羨ましがらせた。

「横浜にはまだ知られていない良い場所がたくさんあるんですよ」と、マイコとジュンコをちょっぴり牽制して羨ましがらせた。

「横浜にはまだ知られていない良い場所がたくさんあるんですよ」と、マイコとジュンコをちょっぴり牽制して羨ましがらせた。

よこはまえんじぇるず
写真左から、ジュンコ、マイコ、ゴリ。
FMヨコハマのインディーズ音楽専門番組「ヨコハマミュージックアワード」でのコーナー担当をきっかけに2006年3月結成された、横浜を拠点に活動する3つのバンドのボーカリストによるユニット。毎月第1金曜の28時(午前4時)台を担当する。
★マイコ I-Rabbits ボーカル。福岡県久留米市出身。
<http://www.i-rabbits.net>
★ジュンコ Capock ボーカル。東京都出身。
<http://capock.net>
★ゴリ LiLi ボーカル。横浜市戸塚区出身。
<http://www.lili5.com>

Photo by Yabe Shiho

フランからレポートまで 出前OKの街おこし応援隊



よこはまじゅえる
「横浜に元気を!」をテーマに活動する、横浜が大好きな18歳~24歳の女の子が在籍するユニット。

この夏、マリンシャトル上でフランダンスを披露してデビュー。10月下旬、リポーターとして横浜を紹介するインターネットTV「YLTV」(YOKOHAMA LIFE TELEVISION)がスタート予定。イベント、企業の運動会、商店街での応援まで、色々な事にチャレンジして、横浜を盛り上げていく。写真上段左から、高木実有、須永香理、伊東亜祐美。下段左から有栖かおり、日吉明日香、相馬亜美。

<http://web.me.com/nsj1/YokohamaJewel>(仮HP。まもなく公式HPがオープン。)

出演依頼はネクストステージジャパン TEL:045-262-0430

地域密着型タレント・ユニット

タレントは東京のマスメディアに取り上げられてこそ成功という既成概念をぶち壊すユニークな芸能活動、「ミニユーティ・タレント・ユニット」「ヨコハマジュエル」が1年間の準備期間を経て活動を開始した。

ブログ、携帯電話、YouTubeなどメディアが多様化し、自己表現の手段も個人化する時代にいまさらマスメディアではなくうど、自分たちの手作りメディアで、住みたい街・横浜に密着して街を盛り上げていこうとする挑戦的な試みだ。

好きだから伝えたい横浜の魅力

岐阜県出身の高木実有さんはテレビドラマ「たった一つの恋」を見て舞台となつた横浜に憧れていた。東京の大学に進学しても横浜への想いは変わらず、レトロな街並みを歩くたび、うきうきしている。この素敵なお街を伝える「地域レポーターになりたい」と話す。

大阪府出身の伊東亜祐美さんは、女優を目指して上京した。以前住んだ神戸と同じ港町に懐かしさを感じ横浜へ。初めての町で心細かつたが、数人の知り合いで通じて、すぐにたくさんの友達ができる。「心優しい横浜の人たちに楽しんでもらいたい」、「笑顔で不景気も吹き飛ばしたい」と意気込んでいる。

有栖かおりさんは千葉県出身。小さい頃に来た横浜の雰囲気が忘れられずやつてきた。横浜は、両親ほど上の世代の人もジャズライブで踊つて楽しむ街。道に迷つて訪ねると、とても丁寧に案内してくれる街。「人の温もりを感じる横浜にもつと関わりたい」と思つてはいる。

横浜が地元というメンバーも、もちろんいる。

鶴見区出身の須永香理さんは高校時代から地域イベントに参加してきた。マー

チングバンドで演奏することもあれば、ごみ拾いをすることも。国際仮装パレードにも参加し、イベントを通じて地域や人と関わる喜びをよく知つている。

都筑区出身の日吉明日香さんは東京の大学に毎日通う中で、地元の居心地の良さに気づいた。「数時間でも横浜を離れているのが寂しくって。やっぱり横浜がいいんです」と笑顔を見せる。

ごみ拾いをすることも。国際仮装パレードにも参加し、イベントを通じて地域や人と関わる喜びをよく知つている。

都筑区出身の日吉明日香さんは東京の大学に毎日通う中で、地元の居心地の良さに気づいた。「数時間でも横浜を離れているのが寂しくって。やっぱり横浜がいいんです」と笑顔を見せる。

今年の夏はフランダンスに挑戦した。7月から9月、5名の選抜メンバーがマリーンシャトルに乗船し、ハワイアンナイトクルージングに出演した。レッスンは厳しかつたが、日本のフランダンス発祥の地は横浜と聞き、そんなフランダンスを学べる機会を与えた嬉しさもあり、驚くほど早く上達したとか。

プライベートでも、横浜のお遊びに行つたりと、横浜の魅力探しに余念がない。10月下旬には、住みたい街横浜がテーマのインターネット放送「ヨコハマライフテレビジョン」の地域レポーターとして登場する予定だ。ヨコハマジュエルがどんな横浜を伝えてくれるのか、楽しみだ。▼

ハマの魅力をインターネットTVで発信

今年の夏はフランダンスに挑戦した。7月から9月、5名の選抜メンバーがマリーンシャトルに乗船し、ハワイアンナイトクルージングに出演した。レッスンは厳しかつたが、日本のフランダンス発祥の地は横浜と聞き、そんなフランダンスを学べる機会を与えた嬉しさもあり、驚くほど早く上達したとか。

プライベートでも、横浜のお遊びに行つたりと、横浜の魅力探しに余念がない。10月下旬には、住みたい街横浜がテーマのインターネット放送「ヨコハマライフテレビジョン」の地域レポーターとして登場する予定だ。ヨコハマジュエルがどんな横浜を伝えてくれるのか、楽しみだ。▼

帆を背負う 港の町の 秋風にいま 紫の帆よ

女たち

水原紫苑
写真 矢部志保

横浜の女たちは、みな、自由でひとりで歩いてゆく。たとえ、恋人といふ時も。

貝紫の高貴な色の帆を掲げたのは、エジプト最後の女王クレオパトラだが、

横浜の女たちは、クレオパトラのように滅びたりはしない。紫の帆は、海から吹いて来た秋風の贈り物である。漕ぎ出せ、女たち。



みずはらしおん 歌人。1959年神奈川県生まれ。早稲田大学大学院修士。春日井建に師事し、以降歌集『客人』(宝文堂)、『わんおん(観音)』(いろせ)、『あかるたへ』、著作『世阿弥の夢』『鬼の肉体』『京都うた物語』などを発表。現代歌人協会賞受賞、駿河梅花文学賞、河野愛子賞など多数受賞。
やべしほ 写真家。1974年生まれ。奈良県出身。同志社女子大学短期大学部日本語日本文学科卒業。96年ドイツに渡り、日本語教師となる。帰国後、平地塾に師事し、独立。渡辺典夫ミュージシャンを多く撮影している。

街灯りと対話が活性化するほど 鈴木伸治さん

横浜市立大学国際総合科学部准教授



すずき のぶはる
写真後列左から2人目。1968年生まれ。横浜市立大学国際総合科学部ヨコハマ起業戦略コース准教授。専門は都市計画。横浜市創造都市アドバイザー。黄金町バザール2008実行委員長。NPO法人黄金町エリアマネージメントセンター理事。2006年春、黄金町でゼミの活動を始めて以来、地域と密接な関わりを続け、黄金町の街づくりに貢献してきた。

黄金町をゼミの活動場所に

全国の注目を集めている街の再生計画が黄金町で進行中だ。特殊飲食店と呼ばれる怪しい店の多い街を官民一体となって刷新していくという計画だ。

その一翼を担っているのが、横浜市立大学国際総合科学部ヨコハマ起業戦略コースの鈴木伸治先生とゼミ生たち。2007年6月から横浜市が借り上げた空き店舗を安全安心の街づくり拠点「コガネックス・ラボ」に改装し、街は教室とばかりに、実践的なフィールドワークを開催している。

鈴木先生の専門は都市計画。それ故に線を引き、道を通し、ハコを建てればすむ時代は終わつたと感じていた。「できあがつた瞬間から街は変化し続ける。気がついて見たら計画とは違う街になつていたということはよくある。だからといって強制的に修正することは難しい。そこに暮らす人々の気持ちを踏まえつつ、コミュニティを再生するというエリアマネージメントの視点がこれからの都市計画には必要」と力説する日々だ。

黄金町との出会いは、2005年にさかのぼる。講演会参加者から黄金町界隈の街づくりについて相談を受け、その日

のうちに見学に行つた。今まで関わってきた都心部とは全く雰囲気も機能も異なる街だった。当時は、神奈川県警がバイバイ作戦と称して違法風俗営業の取り締まり強化を始めた頃。カメラ片手に歩くだけで何度も職務質問を受ける異常な街だった。

これをどう変えればいいのか……。
具体的に動き出したのは1年後だつた。横浜市立大学の准教授となつたのをきっかけに、ゼミの活動場所として黄金町を選んだ。

当時、黄金町は空き店舗が増え、街は閑散とするばかり。この環境を変えるには、まず人の温もりを感じさせる灯りと、集う場が必要だと、作ったのが「コガネックス・ラボ」だつた。

次いで、住民を巻き込もうと、近くの東小学校の児童、保護者、地域住民と街歩きをして大きな地図作りに挑戦した。防犯・防災の視点だけでなく、子どもたちによる、街の宝物探しも地図に盛り込んだ。出来上がつた「東小学校地区安全・安心マップ」は、街の歩みや防災情報と一緒に冊子になり配布された。好評だった。

コミュニケーションで街の空洞を埋める

ゼミと並行して、2008年秋のアートイベント「黄金町バザール」では、実際に強化を始めた頃。カメラ片手に歩くだけで何度も職務質問を受ける異常な街だった。横浜トリエンナーレ委員長を務めた。横浜トリエンナーレの時期に開催を合わせた事も功を奏し、80日間で10万人が訪れて大成功をおさめた。

終了後、ゼミ生たちが今後に生かそうと住民の感想をアンケート調査した。回答者の9割が地元のイメージが変わった、8割が地域内のコミュニケーションが活性化になつたと答えた。良い意見だけではない。浄化活動で客が外に出て行き、売上上がり上げが落ちたと嘆く老舗の店主の声も聞いた。しかし、それは悪いことではないと鈴木先生はいう。「継続的に関わっていることで、住民との距離が縮まり、本音で話合える関係が生まれた証だ」。今年の黄金町バザールでは、学生たちが老舗の店のガイドを作つた。たくさん的人がそれを手に黄金町を歩いた。また、住民、アーティスト、大学、行政が一緒に、アートによる街づくりを進めるNPO「黄金町エリアマネージメントセンター」も発足した。「街づくりに関わる人は増え続けている。コミュニケーションが増えることで、街の空洞化は防げる」。鈴木先生は力強く語つた。

決結成した11年目に全国区行きがんばーん

**C
H
U
R
U
-
C
H
U
W**

ロックバンド



ちゅるっちゅう
写真左から、あっち(ベース)、しんいちろう(ギター)、まんぼー(ボーカル・ギター)、うり(ドラムス)。1998年結成の4人組ロックバンド。全員が横浜市出身で、うち3人は鶴見区出身。2001年FMヨコハマ「YOKOHAMA MUSIC AWARD」第4期グランプリ受賞。2002年関東FM5局主催コンテストグランプリ受賞。2007年鶴見区区政80周年イメージソング「VIVA HAPPY!／つるみ川」リリース。11月21日(土)17時から西友鶴見店屋上にて、1stフルアルバム発売記念フリーライブの開催が決定している。
<http://churu-chuw.jp>

笑顔と明るさが売りのロックバンド

横浜の下町、鶴見。埋立地と工場、運河に囲まれたこの地で活動するバンドCHURUCHUW（ちゅるっちゅう）。人懐っこい笑顔と底なしの明るさ、力強いサウンドとポップなメロディーで、今や地元の人気者だ。11月18日に最初のフルアルバム「大切なコト。」の全国発売が決定している。また、11月21日には西友鶴見店屋上でアルバム発売記念の無料ライブも。ファンへの恩返しというわけだ。

結成は1998年。まんぼー（ボーカル・ギター）の呼びかけから始まった。「あの頃は本当に浅はかで、このメンバーならすぐにプロになれる、って思い込んでましたね」と、まんぼーは語る。そんなに上手くいくはずがない。自主制作のCDリリースは、結成から2年後だった。

その後、コンテストでの優勝を重ね、2枚目のCD「愛なんです」がNTTドコモ北海道のCMに起用され、バンドは最初のブレイクを迎える。プロデビューの話も出た。しかし一転、レコード会社の担当者がリストラされ、その話も、あつけなく消えた。

地元横浜・鶴見を本拠地に再スタート

事実上、そこからが地元、横浜鶴見のバンドとしてのCHURUCHUWのスタートだった。

鶴見駅西口広場でのイベント「鶴見西口オープンカフェ」に月1回の出演、テレビ神奈川のバラエティ番組へのレギュラー出演も決まる。知名度は一気に上昇し、ファンも増えた。

が、それも長くは続かない。

テレビのレギュラー出演終了と同時に、ライブに足を運ぶ人の数も目に見えて減った。

ところが、チャンスが再来する。

2007年、鶴見区区制80周年イメージソングとして6枚目のマキシシングル「VIVA HAPPY!／つるみ川」がリリースされたのだ。ごみ収集車はこの曲を流しながら街を走った。区民ミュージカルで小学生が歌った。高齢者はこの曲で体操をした。ライブのお知らせが回観板で回った。鶴見会館での単独ライブには1000人が集まつた。

観客動員数だけでいえば、最初のブレイクの頃と同じだった。だが、鶴見区の顔となつた彼らの勢いは止まらなかつた。

鶴見の街に響く、屋上フリーライブ

翌2008年、鶴見区のケーブルテレビでレギュラー番組がスタートし、街で声を掛けられることも増えた。「CHURUCHUW」でも「まんぼー」でもなく、その髪型から「キュー・ピーちゃん！」と呼ばれることがよくある。「11年、僕らはひたすら楽しんできただけです。むしろ、見守つてくれてる親の方が大変だったと思いますよ」まんぼーが真顔で言つた。

しんいちろう（ギター）は「同期のバンドはだいたい解散し、同級生は就職、結婚、子どもがいたりして、違う人生を送つて。地元にいるから、みんなの楽しきも、大変さも聞いて、お互いに刺激しあい、応援しあえる。応援ソングが多いのは、鶴見にいるからでしょうね」。メンバーのうり（ドラムス）と、あつち（ベース）も頷いた。

バンド名の由来は、鳥の鳴き声。結成当時、アルバイト先の工場での昼休み、寝転がつていたまんぼーの上空で、コジュケイの「チュルッチュウ」が辺りに響いたことによる。それから11年。今度はCHURUCHUWの音楽が、鶴見の街から全国に響きわたる。



プロムジカ女声合唱団 ジェリービーンズコン サート

横浜開港150周年記念イベントとして、2009年7月18日に横浜美術館でハンガリーのプロムジカ女声合唱団によるコンサートを開催しました。世界的に評価の高い透明感のある美しい歌声が満員のお客さまを魅了しました。合唱団が観客を囲み童謡「ぶるさ」と披露するという演出もあり、美しい歌声にお客さまが包まれるという感動的なシーンもありました。コンサートは30分間に2公演行われ、

横浜信用金庫では、横浜のマーケティングを実践する「横浜ジェリービーンズ倶楽部」事業を展開しています。同倶楽部は「横浜の価値を高める各種の活動」を行うことを主旨的としており、横浜観光プロモーションフォーラムによる認定事業になっています。最近実施された同事業についてご紹介します。

全19曲が披露されました。

「横浜開港150円商店街」 「横浜開港150円商店街」 コンサート

2009年6月から始まつた横浜市内商店街のイベント「横浜開港150円商店街(※)」を盛り上げるため、商店街の近隣の営業店が中心となり「ジェリービーンズコンサート」を開催しました。横浜を中心で活動するボップバンドのN.U.C HURUCHUW、Capoockなどが、つくの商店街・横浜弘明寺商店街・藤原商店街などでコンサートを開催し、商店街への集客とイベントを目的としています。「横浜開港150周年記念イベント」の盛り上げに貢献しました。

多くの人に親しまれてきた横浜をテーマとした歌謡曲「ブルー・ライト・ヨコハマ」、「伊勢佐木町ブルース」、「本牧メルヘン」を題材として撮影した「横浜」の写真を全国から募集し、全102作品が集まりました(募集期間7月9日～8月31日)。9月11日、写真家の佐藤秀明氏、矢部樹氏を招いて審査会を実施し、最優秀賞3点、優秀賞2点、佳作6点が入賞しました。

入賞作品は、横浜ジェリービーンズ倶楽部のホームページ(<http://www.yokoshin.co.jp/jbeans.html>) E-mail:jbeans@yokoshin.co.jp 表示する予定です。

横浜ルネサンス No.14

2009年10月20日発行
発行 横浜信用金庫
〒231-8466 横浜市中区尾上町2-16-1
Tel:045-651-1451(代) Fax:045-651-2303
<http://www.yokoshin.co.jp>
横浜信用金庫総合企画部
(横浜ジェリービーンズ倶楽部)
<http://www.yokoshin.co.jp/jbeans.html>
E-mail:jbeans@yokoshin.co.jp
制作・デザイン PortSide Station Co., Ltd.

横浜観光プロモーションフォーラム
横浜の観光・コンベンションに携わる約1800の企業・団体・市民事業所からなる組織で、横浜への来訪者を増やすことを目的として活動しています。「横浜ルネサンス」を発行する「横浜ジェリービーンズ倶楽部」事業は、同フォーラムの認定事業となっています。



横浜の観光・コンベンションに携わる約1800の企業・団体・市民事業所からなる組織で、横浜への来訪者を増やすことを目的として活動しています。「横浜ルネサンス」を発行する「横浜ジェリービーンズ倶楽部」事業は、同フォーラムの認定事業となっています。

How To Taste Musics In Yokohama.

横浜の聴き方 第7回

『恋人も濡れる街角』 中村雅俊



『恋人も濡れる街角』は、ザザンオールスター雅俊が歌った1982年の作品である。手元にあるコンピレーションCDには、この曲について「アダルトな歌詞」という解説が付いている。確かに思わずぶりで意味深な表現もあるが、この曲について「アダルトな歌詞」という解説が付いている。確かに思わずテレビでよく聴いた当時は、そんな印象は覚えなかつた。以下に述べるように、歌詞を聴かせる曲ではないからだらう。

歌詞を通して読むと脈絡がないというか、全体に整合性がない。これは桑田の作品によく見られる傾向である。筆者は桑田とS.A.S.の熱心な聴き手ではないので、ごく初期の作品の印象で述べると、この曲の詞はデビュー作『勝手にシンドバッド』などと同様に、ポップミュージックとして完成度を優先させているのだとと思う。つまり、メロディやリズム、リフなどバックのサウンドとの相性を優先して言葉を選択していく、歌詞全体では「詩」としての整合性を放棄しているのである(当然、曲先で作るのだろう)。ちなみに、こういう作詞スタイルの先駆的存在がキヤロルのジョニー大倉である。

桑田には『たかが歌詞じゃねえか、こんなもん』

『恋人も濡れる街角』は、「YOKOHAMAじゃなかつた。そのため、ボーカルは楽器の一種として割り切つて聴く習性がついてしまつた(少なくとも筆者の場合は)。桑田の歌詞に関する創作姿勢には、度を優先するという桑田の感覚は、60年代から70年代にかけて洋楽をラジオで聴いて育つた世代のものだろう。レコード(アルバム)が高価で簡単には買えなかつた当時は、英語の歌は耳で聴いて覚えるしかなかったが、たいていは何を歌っているのかわからなかつた。そのため、ボーカルは楽器の一種として、いが、実際はその前に「不思議な恋は女の姿をして……」という一節が入つていて、いな詞の中でもさらに意味不明なフレーズで、この曲全体がファジーな作品だと宣言しているようにも読める。直接的に横浜を示唆する言葉は、「YOKOHAMA」と「馬車道」がそれぞれ1回ずつ使われているが、この二つの地名だけが、詞の中で独自のリアリティと磁力を発している。必要最小限の言葉しか使わずに、立派に横浜の歌として成立させてしまう力は、中村雅俊の歌唱も含めて音楽の魔術といわざるをえない。(中島久)▼

明日がある アツイゼ!ヒューヒュー!!!

vol.5 アコースティックver.



浦野太郎と
トルモントン



N.U.



CHURU-CHUW



ウラジミール・レインズ



フロウズン

横浜ライフデザインフェア 2009

10月31日(土)
クイーンズサークル

(みなとみらい駅下車クイーンズスクエア 1F)

16:00start 観覧無料

横浜ジェリービーンズ倶楽部 × アツイゼ!ヒューヒュー!!!!

横浜に集客し横浜を盛り上げるために、横浜信用金庫 横浜ジェリービーンズ倶楽部*が企画・開催している「ジェリービーンズコンサート」。第28回目は、神奈川(横浜)をホームに活動する5組の人気バンドが立ち上げた、クールでエキサイティングなイベント「アツイゼ!ヒューヒュー!!!」(通称:「アツヒュー」)とのコラボレーションでお送りする。2008年1月に始動し今回5回目を数える「アツヒュー」は、あくまでも音楽を中心に行きながらも、音楽だけに留まらないバラエティな企画と、メンバー全員参加のパフォーマンスの数々が見逃せない大注目のイベントである。

*横浜ジェリービーンズ倶楽部：「横浜の価値を高める」ために活動する横浜信用金庫のプロジェクトチーム

主催 横浜信用金庫 横浜ジェリービーンズ倶楽部